

令和8年度 第2回 学校運営協議会 議事録

日時： 令和8年8月6日（木） 9:30～11:30

場所： 静岡県立沼津特別支援学校伊豆田方分校 耕友会館

参加者： 学校運営協議会委員、分校教職員（全職員参加）

校長挨拶「多様な視点で拓く、生徒の未来と安全」

本日は、全職員が参加し、委員の皆様と直接意見交換を行う「対話」の場として設定いたしました。本校の教育をより良くするためには、教員だけの視点に固執せず、地域の皆様の知見や経験を反映させることが不可欠です。本日は以下の2つの大きなテーマについて、視野を広げ、考えを深める機会にしたいと考えています。

＜テーマ①防災体制の強化について＞

学校に生徒がいる時間帯だけでなく、夜間や休日など学校が閉じている時に発災した場合、どのように学校を開放し、誰を頼り、どう動くのかという課題があります。現状の把握と、実践的な課題の抽出をお願いします。

＜テーマ②社会生活へのスムーズな移行について＞

高等部3年間の学びが、その後の長い人生にいかに関わるかが最大の課題です。教員の「教える」視点だけでなく、社会で「共に生きる」視点から、生徒に真に身に付けさせたい力について忌憚のないご意見をいただきたいです。

本日の協議に「唯一の正しい答え」はありません。それぞれの立場から多様な意見を出し合い、5年後、10年後を見据えた学校づくりの土台としましょう。

グループ協議1

【安全・安心な学校体制の強化、防災教育の充実について】

～5年後も安心できる学校であるために、今年度最初に取り組むべきこと～

＜A グループ＞

防災教育	防災教育が形式的なもの（形骸化）にならないよう、「実践的」であることをキーワードとした。単なる避難経路の確認に留まらず、実際に被災した場面を想定し、自分たちで判断して動く力の育成を目指す。
具体的な取り組み	
D-MAT(医療)、D-WAT(困り感を手助けする)認知が少ないから…	
・実践的な避難訓練の実施（余震・避難生活を含む想定） ・ハザードマップの活用と被災事例の理解 ・通学路の危険箇所を確認する ・校舎内待機を含めた避難方法の検討 ・防災における自分の課題（自己理解）の把握 ・防災食の試食・備蓄品の確認 ・避難完了時間の計測・振り返り	
・地域・関係機関と連携した防災訓練（役場・施設等） ・訓練の目的を明確にして実施する ・田農との合同シミュレーション訓練 ・生徒向け避難・防犯マニュアルの作成 ・避難はしごなど防災設備の使用体験 ・消火器（水消火器）の使用体験	

地域連携	地域の防災訓練への積極的な参加や、近隣住民との日常的な挨拶を通じ、「顔の見える関係」を築くことが重要。いざという時に「助けて」と言える、また地域の一員として関われる関係性をどれだけ密に作れるかが、安全の根幹となる。
具体的な取り組み	
・地域の防災訓練に参加 ・消火栓、チェーンソーを使う。 ・地域の方と、顔見知りになる	

危機対応力	「公助・共助・自助」のバランスを意識した対策をする。具体的には、初期対応マニュアルの整備や避難梯子等の設備確認といった「学校としての備え」と、職員個人の意識向上（車のガソリンを常に半分以上維持するなど）という「個人の備え」の両輪で危機管理能力を高める。
具体的な取り組み	
・トイレ対策（災害発生後 9 日分の備蓄が必要）→使用後の排泄物の保管・処理方法について検討が必要 ・車の燃料管理→災害時に備え、ガソリン残量が半分を下回らないよう管理する。 ・初期対応マニュアルの整備→災害発生直後の職員の役割や行動を明確にした、初期対応専用マニュアルを作成	

<B グループ>

防災教育	高等部 3 年間を見通した系統性のあるシラバス（年間計画）の見直しの提案。過去の研修成果を活かし、生徒一人一人の障害特性に応じた学習を深めることが不可欠である。卒業後、社会に出た際に自ら身を守る行動が取れるよう、体験的な学習を継続する。
具体的な取り組み	
・障害特性に応じた、一人一人に合った防災教育を行う。 ・生徒が自分の言葉で防災について説明・発信できる力を育てる。 ・体験的な学習を通して気付きや考えを深める。 ・生徒が防災を「自分事」として捉えられる学習を充実させる。 ・総合的な探究の時間で、防災への不安や課題を言葉にする機会を設ける。 ・通学路の危険箇所調査や防災マップ作成など、実践的な学習を行う。 ・地域の災害の歴史（例：狩野川台風）や地域防災について学ぶ。 ・役場等と連携し、地域の防災について主体的に調べる活動を行う。 ・地域自治会と連携し、学校周辺の危険箇所を調査し、防災マップに反映する。	

地域連携	学校周辺だけでなく、生徒が実際に暮らしている居住地の地域理解も深める必要がある。自分自身の特性を知り、地域を知るための「防災マップ」の作成などを通じ、生徒が能動的に地域と繋がるきっかけを作る。
具体的な取り組み	
・自治会と情報共有を行い、地域の防災訓練へ参加する。 ・自治体の防災体制を学び、その学びを生徒へつなげる。 ・地域の方を講師に招き、地域の災害や防災について学ぶ。 ・作業学習や生活単元学習を通して、地域で学ぶ機会を増やす。 ・地域住民に学校や授業を知ってもらう機会を充実させる。 ・教職員の異動を踏まえ、地域とのつながりを継続できるよう引継ぎを充実させる。 ・生徒が地域住民と顔の見える関係を築く。 ・防災マップを活用し、居住地域の危険箇所や避難場所を理解する。	

危機対応力	「想定外」のリアリティな訓練の実施を重視する。怪我人の発生や建物の損壊など、具体的な状況を設定し、マニュアル通りにいかない場面で教職員自身が主体的に動けるかを訓練の場で実践。
具体的な取り組み	
・告知なしの避難訓練など、実践的な訓練を実施する。 ・避難経路の変更など、想定外の状況を取り入れた訓練を行う。 ・多様な災害、事故を想定し、危機対応力を高める。 ・基本行動（身を守る・避難する）は繰り返し指導し、確実に定着させる。 ・初動だけでなく、揺れが収まった後の職員の対応力を高める。 ・職員主体の実践的な訓練を継続し、状況判断力を養う。	

<C グループ>

防災教育	登下校中や休み時間など、「教員の指示がすぐには届かない場面」でのシミュレーションを強化する。非常食の活用や、寝袋での宿泊体験といった、より具体的かつ生活に密着した経験を積むことで、生徒の「生き抜く力」を育む。
具体的な取り組み	
・登下校時や校内など、場面ごとの避難シミュレーションを行う。 ・役場と連携し、災害時のトイレ問題について学ぶ。 ・防災宿泊学習を実施し、避難生活を体験する。 ・非常食体験を継続し、災害への備えを実践的に学ぶ。	

地域連携	学校と地域が互いの防災マニュアルを知る。挨拶運動やお祭りへの参加など、「防災を入り口にしない日常の関わり」を通じて信頼を築き、災害時にお互いがどう動くべきかの共通認識（運用ルール of 共有）を深める。
具体的な取り組み	
・地域と学校の防災マニュアルや役割を共有する。 ・日頃の学習で地域と交流する機会を設ける。 ・地域の文化や特色を学ぶ機会を設ける。 ・仁田駅などで地域と連携したあいさつ運動を実施する。 ・地域住民との日常的な交流を深める。 ・学校だよりなどを活用し、学校の取組を発信する。 ・地域の文化祭へ生徒作品を出品する。	

危機対応力	現状では「地域を知る」段階に重点を置いていますが、今後は発災時の具体的な情報共有手段（田方農業高校との連携名簿の整備など）について、より詳細な検討が必要であるという課題が示された。
具体的な取り組み	
・ICT を活用した保護者への情報伝達体制を整備する。 ・通信障害を想定した連絡手段や引き渡し方法を確認する。 ・災害時の保護者送迎ルールを事前に共有する。 ・災害時の通信手段として、衛星通信（スターリンク等）の導入を検討する。	

グループ協議 2

【学校生活から社会生活へのスムーズな移行について】

～卒業後に安心して働き、暮らすために、高等部で身に付けておきたい力～

【A グループ】

働く力	生徒自身が自分の得意・不得意（特性）を正確に把握する「自己理解」の深化を重視する。将来の就労に向けて、ハローワークや相談支援事業所などの社会資源を具体的にどう活用するか、サービスを受けるための連絡方法なども含めて学習する。
生活する力	キャッシュレス決済やネットショッピングが普及する中、情報の真実を見抜く力を養い、詐欺被害等から身を守るための学習を家庭と連携して進める。また、挨拶や体調管理といった基本的生活習慣の確立を基盤とする。
つながる力	「分校の存在を社会に発信する」ことで、生徒の居場所を作る。田農マーケットへの出店、地域の清掃活動、他校との交流などを通じ、地域から必要とされているという実感を育み、それが将来の働く意欲へと繋がる好循環を作る。

【B グループ】

働く力	社会人としてのマナーに加え、SNS や AI などの情報を正しく判断し活用する力を重視する。トラブルを未然に防ぐためのリテラシー教育は、卒業後の安定した職業生活を守るために不可欠である。
生活する力	家庭内での家事スキルの習得と役割を継続する。成功体験だけでなく、あえて「失敗する経験」をすることも重要である。失敗し、悩み、そこから周囲の助けを借りて立ち直るプロセスこそが、社会で生きていくための真の強さ（レジリエンス）が育つ。
つながる力	地域活動において地域がもっと、生徒が具体的な「役割」を担う機会を作っていく必要がある。お祭りや防災活動で「あなたがいないと困る」と言われるような経験を通じ、地域側も生徒への理解を深め、共に変化していく環境づくりを目指します。

【C グループ】

働く力	全てを自分一人でこなすことだけが自立ではない。「支援付きの自立」という考え方を共通認識とし、困った時に適切に「助けてください」と言える「人を頼る力（相談・依頼する力）」を育てる。
生活する力	睡眠・食事・整理整頓といった生活習慣の定着を、保護者と共に根気強く進めます。家庭での役割が最終的に社会での「働く力」に繋がっているという意識を、教員と保護者が共有し、一貫した支援体制を作ることが重要である。
つながる力	「知らない大人ともコミュニケーションが取れる力」の醸成を目指す。地域の多様な人々との関わりを通じ、地域全体で生徒を支える安心感のある基盤（サポーターの顔合わせ等）を構築していくことが、卒業後の安心感に直結する。